

# 「パネルディスカッション」

## 〈テーマ〉 「古代・小川原湖と“尾駮の牧”

### — 一人・物・情報の交流について考える —

◇パネラー：入間田 宣夫、長尾 正義、進行役-相内会長、 ◇司 会：高澤 聡

相内： 本日はシリーズ最終回ということで、この6年間、お付き合いして下さった方もいるかと思いますが、本当に今日は、結論にふさわしい、まあ、決定的な証拠でこうだとまでは言えなかったんですが、ほぼ、そういう、私がイメージしていた結論に近づいたのではないかな？と喜んでおります。

私もこの「尾駮の牧」を通した古代の、この地域の考察を始めたきっかけは、入間田先生にいろいろとご相談させてもらったこともありまして、今日、先生が来て、小川原湖を挟んで出土した緑釉陶器や、もしくは当地の石帯(鉞尾)を見て驚いて頂いて、ひょっとしたら、この延久2年の「北奥合戦」の前から、この公的な馬のルートが七時雨山を越えて来ていたんじゃないかな？という発言をして頂いたことには、私としても、これまで6年間、フォーラムを積み上げてきて大変良かったなあ～と思わせて頂いております。

951年に尾駮の駒が『後撰和歌集』に登場して以来、大石直正先生の資料によりますと、(藤原)道長の政権時には、陸奥交易馬の定数が20疋、息子の頼通の時代には30疋となっていて、確実にきちんと交易貢馬が行われています。それで、先のフォーラムでも述べましたが、陸奥守の一番の大きな仕事は、この5年の任期の間に陸奥交易馬を揃えて、何としても京都に送らねばならなかったと…。

実際に定例化したのは、長保元年(999年)に、道長が陸奥交易馬を天皇に見せる前に、「御馬御覧」の儀式をする前に、勝手に、自分の自慢の京の都の屋敷に作った馬場で馬を走らせたという辺りから、本格的になってくると思うんですが…。実は、その前からも陸奥交易馬自体は、定数は別としてあったわけです。

そのころに、今日の「基調報告」のお二方のお話にもありましたように、10世紀前半から10世紀末にかけて、このような緑釉陶器が出土したことに关しましては、一番最初の2012年のフォーラムで大阪大学の高橋照彦先生が、「これは確実に、東海産じゃない、また多賀城経由ではない、京都から直接的に入って来たとしたか考えられない緑釉陶器じゃないか？」とのお話を頂きましたが、また当地のフォーラム、六ヶ所村のフォーラムの特徴的なことなんですが、文学的、精神的背景から遺物を検討するという視点で見たところ、やはり石帯のまだら、白玉帯の持つ意味ですね…。いかに、当時の貴族たちがそういう精神的な部分でも、それらを重宝として自慢としていたか…。たとえ、それがベルト全体ではなくてその飾りの一角である瑪瑙の「鉞尾」だとしてもですね…。そういう白玉帯が当地で見つかつ

ている…。

等々、考えた時にですね。今日の入間田先生のお話で、ひょっとしたら、民間レベルの物流以外でも…というお話が出たということは、まさに、今日のお話の画期的なことではなかったかと思えます。

それと、海上ルートですね…。三陸海岸をまわって、小川原湖に入ってきて、野辺地の先まで東海産の焼物、陶器が運ばれているということも驚きで…。また、実は白玉帯が出土した「表館遺跡」の同じ住居址からも、五所川原産須恵器の立派な長頸壺が出ているんですが、そういう流れも含めて、また、米作りが津軽地区に先に来て、それから逆に、北から南へ広まって行ったという、こういう流れなども、これまで聞いたことが無かったので、実に面白いと感じております。

そこでやはり、私、前々から思っていたんですが、定期的に京の都に運ばなければならない交易馬を、適当に当て推量で、毎回探しに来るはずはないと思っておりまして、必ずその正規のルートがあるはずだと思っていましたが、今日の入間田先生のお話から、改めて、そのことを確信させて頂きました。

それとですね。最後に結論付けて下さいましたが、まずは、商人とお坊さんの往来が先であるというお話にも、私、痛く感銘しております。その点について言えば、錫杖状鉄製品も六ヶ所から出ておりますし、また、津軽地域からもたくさん出ております。

それで、今日の午前中の瀬川さんのお話の中でも、環濠集落である「二十平(1)遺跡」の堀の中からも、鉄滓や小石を堆積している中から、何点もの錫杖状鉄製品が出ていたということなんですが、多分、重労働も強いられていただろう上から、「地鎮祭」のような祭祀を行っていたんじゃないかな？という話もありましたが、私は、同遺跡の転用硯等の出土も含め、この地域は、北緯40度線の上ですが、また国の外とも言われながらも、当時、すでに日本国と同じ、そうした文化、精神性を持っていた人が住んでいたということが、明らかにされたんじゃないかな？と感激しております。

そうした点で、また、いろいろと質問して行きたいんですが…。

あっ、それと一応、今回でフォーラムも一時お休みで、来年には、これまで6年間のフォーラム講師先生方による本を刊行する予定なんですが、また刊行されましたら、是非とも、皆様にもお買い求めいただけたらと思います。

それで、今日の入間田先生のお話で出ていた、「前九年合戦」までにつながる、あるいは「糠部」までつながって行く背景で、安倍富忠とか出て来るんですが、そうした勢力の母体がこの地域にあったんじゃないかな…と。

ましてや小川原湖が文化の入り口となっている…。その文化の入り口の辺りに、実は地元には、「安倍館」っていう伝承があるんですが、これは、八幡太郎義家と安倍貞任が戦った跡だという言い伝えが残っていて、歴史的事実とはそぐわないとは思いますが、ただ、うちの会顧問の伊藤(一允)先生も言っていたんですが、あくまでも、安倍富忠を中心とした、そうした勢力のもとに「前九年合戦」の始まったいきさつに関係していると思われ、本当は、このフォーラムもそこまで考察したいと思っていたのですが、そこまでに行くには、もうちょっと考古学的な新たな発掘成果等も必要になってくるだろうな…と思うので、取りあえず、

今回で一纏めにしたいと思っております。

そうした上ですね。入間田先生、「尾駁の牧」と安倍富忠までつながる…、なかなか難しいテーマだとは思いますが、その辺の考察について、もう少し、先生のお考えをお聞かせ頂けませんかねえ…。(小笑)

入間田： えー、難しいんですけども、安倍富忠は、二戸、あるいは下北辺りまでの取りまとめで、その辺のリーダーだった。そのころ、すでにこの地域は馬の産地として、一戸から九戸っていうキチツとした格好ではないんですけども、すでにもう、そうなってますから、そうになると、当然、“安倍”っていう姓をもらってくる事態がね…、中央とのそういう公のつながりがあって、したがって、貴族好みの緑釉であるとか石帯であるとか、そういうものをもらうような人でしょうから、それが、現地の馬の牧場の取り仕切りをやっているっていうことは、当然考えられることでありまして、むしろこれまでは、石帯だけ言ってきたわけですけども、今日みたいに緑釉であるとか、いろんな他にも関連する遺跡が出て来ると、やはり、そういう現地の勢力が、馬の、牧場の取り仕切りをするにつれて、逆に京都との、あるいは陸奥守とのつながりの中で、いろんなものをもらっているということが見えてきて、それが今回、いろいろと明らかになったんじゃないかと、思って喜んでおります。

相内： 最初、実は、このお話で、入間田先生にご相談し上げた時には、なかなか引き受けて頂けなかったんですが、多分、これまでのようなことが言える状況じゃなかったんだと思いますが、やっぱり、六年間積み上げてきた結果、いろんな方面からも、文化的・精神的に考察しても、当時の、これまで話ししてきたような背景があったんだと考えて、差し支えない状況になってきたので、今回のような、結論的なフォーラムまでたどりつけたんじゃないかなと思っています。

それで、長尾さんにお聞きしたいんですが、やっぱり、(「平畑(1)遺跡」の)「鉄鈴」って気になりますよね…。

長尾： そうですね。間違いなく、多分、馬用だと…。

相内： そうですよ…。人間が首に、あの大きさの鈴をぶらさげるわけではないですよ。ドラえもんじゃないんですからね…。(小笑)

それで、今日、「二十平(1)遺跡」の話をしたんですが、実はあそこに「御手洗瀬川(みたらしがわ)」って流れているんですよ。「御手洗瀬川(みたらせがわ)」…。実は、うちの顧問の伊藤(一允)先生が教えてくれたんですが、「奥入瀬川」は、地元の方は“おうらしがわ”と言う…と。で、「仁土呂志(にとろし)」と「御手洗瀬(みたらし)」を考えた場合…。要するに、何を言いたいかというと、「鉦屋・仁土呂志・宇曾利」という、広範囲な地域を安倍富忠がまとめたと言うんですけど、入間田先生のレジュメに載っている、斎藤利男先生の「北の防御性集落遺跡分布図」じゃないですけども、あの地図を見た時に、

やっぱり、「仁土呂志」地域っていうのは、この辺を含めた上北郡が大きく入っているんじゃないか…と。浜通りを含めてですね…。

それで、上賀茂神社の藤木保誠さん(2014年のフォーラム講師)が言っていたんですけども、やはり、通常、「御手洗瀬川」があるっていうことは、それに伴う神社形式のものを、やっぱり祀っていたんじゃないか…と。それで、瀬川さんは、今日は話さなかったんですが、やたらたくさん、製塩土器が出土している…と。それって、非常に儀礼的なものを感じるとよく話されていたんですが、それで、京都からすると、敵対する人は皆、“えみし”だとか“俘囚”だとかという話を、入間田先生、話されていたと思うんですが、そういうふうにはさげすんで見ているという部分の中で、貴族って、非常に“穢れ”とかを嫌がると思うんですが、そういう点で、<sup>※1)</sup>“奥地から来る”っていう意味でも、そういった文化含めてあったんじゃないかな?と思うんですが、入間田先生はどう思われますか?

※1)…『清水寺縁起絵巻』をみると、古代の人々(都人)は九世紀中ごろ以降、正式な日本の外交が途絶えると、陸奥国・佐渡国より外はケガレの地で、疫鬼が住むと認識していたようで(『日本の歴史・平安時代「揺れ動く貴族社会」』)、同絵巻が16世紀頃に描かれたものであるところから、後世まで“まつろわぬ人々”への差別意識が根強く残っていたことが窺い知れるとしている。

また、大石直正氏は「奥六郡を建置するということは、国家側からみて、そこまでしか郡の建置が及びえなかったという消極的意味をもつだけでなく、その北を蝦夷村としてはっきり区別し、その居住者をもっぱら蝦夷として扱おうとする積極的意味があったとしている。(『中世奥羽の世界』所収「中世の黎明」)

また、川尻秋生氏は上述『日本の歴史・平安時代』の中で、当時の人々はケガレは伝染すると考えていたとし、一定期間、謹慎するほか、「穢札」を立てて他の人への感染を防ぎ、逆に祭祀などを行う場合には、「不定人不可来札」などを立てて、ケガレから身を守ったとしている。

入間田： なかなか、難しいんですけども、さっきの続きになりますけどね。今まで学界なんかでは、「尾駁の牧」というと、やっぱり宮城県の石巻の辺りとか…。なんで、こっちの方に菅江真澄が来たり、昔から知られているのに、「こっち側にあるはずがない」っていうふうに言うのかというと、やっぱり、そんな古い時代までさかのぼって、京都風のいろんな文化、あるいは政治勢力が、北緯40度線を越えたこっち側まで及んだはずがない…。だから「尾駁の牧」のような官営牧場なんかあるわけがないっていうのが、今でも日本の学界の大部分の人がそう思っている…。

ところが、このシンポジウムで石帯はあり、あるいは今日のように緑釉もあり、あるいはそういう格好で、「延久合戦」1070年はるか以前、何世紀も前から個別に地元のリーダークラスの人に、ちゃんと日本国側から唾がついて、「安倍」なんかという姓ももらっている、そうすると、当然、そこには陸奥守の直営の牧場があったとしても不思議ではないということになるんだと思うんです。

「その不思議ではない」っていうことを、これまでの学界では否定しようがないくらいの重みをもって、この六年間、やってきたというのが、最大の成果じゃないのかな？っていうふうに思うんですよね。

だから、最初、私も“まゆつばかなあ”って思っていましたけど、いくら相内さんに石帯の話聞いても、「それだけかい」っていう感じで居たんですけどね…。(小笑)

ここまで材料が揃ってくると、しかも、民間ルートの物流とは別個に七時雨峠を越えたという、そういう政治的ルートの存在もはっきりして来て、それと、民間ルートの物流と両立になっている。そこらあたりで、非常に、何ていうか、信じてもいいような状況になってきたんじゃないかなというのが、私の今日の印象です。

相内： そうですね。ありがとうございます。

私、安倍富忠を説得するときに、下毛野興重を使者とした…ということなんですが、その興重は、亡くなった高橋富雄先生の論稿を読んでいくと、陸奥国交易馬御馬使をつとめた高級官僚の下毛野氏の末裔だろうと思っているんですが、なかなか文獻的には、そういう名前が出て来ないんですけども。やはり、わざわざそういう人を説得によこしている…。頼義がですよ。京の人間が…。そういう意味で、安倍富忠という人は、どういう出自の人なんでしょうか？ 本家筋と思われる安倍頼時は、在庁官人とお聞きしたんですが、やはり、それにつながる親戚筋と考えてよろしいんでしょうか？ 安倍っていう姓をもらった人たちは…。

入間田： う～ん。その辺は難しいんですけども…。 “安倍” という姓名は、勝手に名乗っているというわけではなくて、それから、これまでは逆に、安倍氏っていうのは蝦夷の親分だから、その仲間づきあいで、勝手に “安倍” って名乗っていたんだろうという感じもあったんですけども、そうではなくて、安倍氏自身がむしろ、胆沢城のれっきとした、今で言えば、県庁の幹部クラスのそういう存在であって、だから安倍富忠は勝手に、私に名乗っているというわけではなくて、ちゃんともっているんだと思うんです。そういう名乗りを…。ですから、そういう点で言うと、安倍富忠の存在、あるいはその下での官営牧場は、六戸になるか、七戸になるか、二戸になるかというのは問題としても、その存在っていうのは、今から数年前と比べると、はるかに信頼度が増していると思います。

相内： 長尾さんに、ちょっと確認しておきたいんですが、三沢市の織笠地区の人たちって、岩手県の陸中山田町から移住して来た人たちだって、チラッと聞いたことがあるんですが、やっぱり、そうなんですかねえ 織笠地区ですが…。

長尾： そうですね。それは、織笠だけじゃなくて、根井とかですね。山中、駒沢とかですね、その辺は全部、京都方面から来たとか、流れて来たとかっていうのは確かなようです。それが例えば、駒沢とか、進藤とかっていうところは、今日、発表した中の「小川原湖伝説」

の中に、実際に名前が出てくる人たちなんですね…。本当かどうか分からないんですけども…。

相内： 実は明日、「小川原湖伝説」の倉内の「安倍館」と「八幡館」（三沢市）、「八幡館」は八幡太郎義家が拠ったところに遺跡があるということなので、長尾さんに紹介して頂いて、入間田先生をお連れしようと思っているんですが、やはり、そのものの戦いじゃないかも知れませんが、小川原湖が、先ほども申しましたように、当時の“文化の入り口”であり、当会顧問の伊藤先生は、安倍富忠が屋敷が小川原湖の対岸にある、東北町の「軍事屋敷」という地名があるところを比定しているんですが、そうした場合、小川原湖の入り口である倉内地区の「安倍館」が、人の出入りとか、船の出入り、または物の出入りを管理する場所となっていて、ちょうど「狼煙(のろし)」を上げて知らせる良い場所になっているんじゃないかとの仮説を立てているんですけども、私もここが、「前九年合戦」の安倍富忠との密約を交わした場所としたら、おもしろいところだなあ…とされていて、それこそ、ロマンなんですけれども、八幡太郎義家が「八幡館」から小川原湖を越えて、対岸の「安倍館」へ放ったという矢の伝承は、安倍頼時が返り討ちに遭ったという矢の話が転じて残っているんじゃないかと思ったりしています。(小笑)

また、『村史』では、戦いの後、安倍氏は敗れてこの尾駈の地に逃げてきたということになっていますが…。まあ、こういう伝承というのは、いつ作られたか？というのが問題なんです。(小笑)

ただ、言えることは、そうした交易を通しての勢力がこの地方に確実にあったんじゃないかと考えるわけです…。それを示すものとして、今日のお話ではないですが、そうした遺物等も出て来ておりますので、あながち全て、作り話とも言えないのではないかな？とも考えるわけです…。

また、2014年のフォーラムで、伊藤先生が話したんですが、中世の1325年の「安藤宗季譲状」出てくる「なかはまの御牧」とは、“長い浜の御牧”のことを指していて、この太平洋岸に連なる長い浜通りにある「木崎の牧」と「七戸の牧(尾駈の牧)」を指しているんじゃないかとも話していましたが、私もそれは確かな考察ではないかと思っています。

そうしたことで、今回のフォーラムはいろいろと核心的なところを突いてきたと思いますが、それでは、ここから、私の他にも、もっとお聞きしたい方がおられると思いますので、会場の皆様に、マイクをお渡ししたいと思います。

### 〈会場からの質問〉

会場(A)：“後撰”というのは、後に選んだということだと思いますので、『古今和歌集』から漏れたものではないか…？ だから「みちのくのをぶちこまものがふには あれこそまされなつくものかは」という歌は、905年ではないかと思っています。以上です。



相内： 昨年、お出でいただいた、国文学の、『後撰和歌集』研究の大家である山口博先生によれば、後撰集に初出した“をぶちの駒”は、詠み人知らずになっていますが、これは、仮説だと言っていました<sup>※2</sup>、「藤原兼家」が詠ったんじゃないかと仰っておられました。

※2)…山口先生の仮説では、『後撰和歌集』の詠み人知らずとは、本当に作者がわからない「伝承の古歌」の場合と、事情があって、作者はわかっているが名前を伏せている「同時代の秘匿すべき事情ある歌。有名人の恋歌など」の場合の、二通りではないかと考察している。

後撰集に初出した“をぶちの駒”は、伝承の古歌にしては、作歌事情が具体的過ぎるとし、また、伝承歌はエピソードの主人公に人々は関心をもっており、主人公の名が伝わらないというのも疑問であるし、したがって、この歌の作者は、有名人の歌の可能性ありとして、それは藤原兼家ではないかとしている。（兼家 23 歳頃。延長 5 年〔929〕生誕とすれば、952 年頃か？）

高澤： ということで、よろしいでしょうか？ では、次の方…。

会場(B)： 「前九年合戦」のですね。早い時期にですね…。先ほども、先生がご紹介下さいました金為時と下毛野興重でしょうか。安倍富忠に加勢して欲しいということで赴くのですが、これを阻止しようとして、安倍頼時がこちらに向かって来てやりあい、最終的には鳥海柵で亡くなるわけですが、この安倍富忠っていう御仁は、この三部の首長としてまとめて政府側に加担するわけですが、この「前九年合戦」を見通した時に、非常に功績のある立場であったわけですが、ところが『陸奥話記』等に、その時出て来るだけで、その後、他の中央の書物には全く出て来なくなるわけですが、実際は、どういう末路になったっというか、たどったのか？分かる範囲で教えていただきたいんですが…。

で、併せてですね、延久 2 年の源頼俊と清原氏の三方向での戦いというのがあったわけですが、その折で、ひょっとしたら、(安倍富忠が)つぶされたのでしょうか？ 私はそう思っているのですが…。その辺のところを教えていただければ、ありがたいのですが…。

高澤： 入間田先生、お願いいたします。

入間田： 残念ながら、『陸奥話記』なんかでは、ここに一回だけ、安倍富忠が出て来るだけで、その後、どうなったか？ということが書いてないんですね…。ただ、仰ったように、やっぱり、安倍頼時、つまり、岩手県辺りの勢力の後ろの方にいながら、率先して…というか、誘いに応じて日本国側についたわけですから功績は、非常に大きい。

例えばの話ですけども、誘いに行った使いの金為時という金(こん)氏、あるいは金(きん)氏。これは“気仙郡”という、岩手県陸前高田市という、あの辺の郡司。だから、海沿いに行って、安倍氏のいる陸路は通れないで、海路伝いで行って、今の八戸辺りで上

陸して、多分、話をしに行ったと思うんですけど…。

その金氏が、その後も、気仙郡の郡司、有力な豪族として、おそらくは気仙郡の郡司、責任者として任命されているのです。

そうなると、やっぱり、安倍富忠も、さっき申し上げたように、この地域には一戸から二戸、三戸、四戸っていう特別の区画ができますね。その内の例えば、二戸とか、あるいは四戸でも良いんですけど、そういうところの役所のね、やっぱり責任者ぐらいには取り立てられていると思うんですよ…。ただ、その証拠がないので、何とも言えませんが…。

つまり、新しく役所をつくるっていう場合でも、そこの地域の、元々のそこの実力者の協力を得ないことには、いくらお上、政府の方で力があっても手も足も出ませんから、元々の、つまり現地の有力者を長、責任者に据えるなりしたに違いないですね。

ですから、そういう点では、もう延久2年の「北奥合戦」の時期には、一戸、二戸～八戸の辺りは、日本国の側に属していますから、そこの責任者として、多分、振る舞ったというふうに思うので、多分、仰るとおりだと思います。もしかすると、日本国側による「閉伊山徒」の攻撃に参加しているのかもしれないね。

高澤： よろしいでしょうか。ご質問、ありがとうございました。

会場(C)： 質問したいのは、テーマであります、“尾駁の駒”っていう馬は、どんな馬だったのか？



自分の頭に描けるようになりたいんですね…。それが、浮かんでこないんですよ。聖徳太子が乗った黒光りする馬だとか、そういったものは伝説かも知れませんが、名前がついたり、絵になったりしておりますね。

それから、南部馬で有名な“いけづき”“するすみ”とか、軍記物にもう、人間以上に、サムライ以上に馬の姿や名前が、毛並み、体高、あらゆるものが芸術的って言っていいくらい、文学の世界でも述べられています。たくさんの皆さんが仰って下さった名馬の、駿馬の日本一の代表たる、“尾駁の駒”が一体どんな馬なのか？ 私は、いまだに描けないんです…。教えて下さい。

高澤： これは、相内会長、よろしくお願い申し上げます。

相内： 私が言うっていうより、今まで来てくれた講師の先生方の話をまとめると、本来、アジアの馬は“果下馬”と言われていて、馬の背に乗って果物の実を採れるくらいの、あまり背の大きくない日本の在来馬ぐらい大きさだと思うんですが、その中でもやっぱり、“尾駁の駒”は大きい部類だった可能性が高いですよ…。まあ、平安時代には主に儀式で使われていて、源平時代になると、合戦で活躍する南部馬をイメージしたりするんですけども…。

で、“まだら”っていうのは、英雄が乗る馬だっていう、思想的にかもしれませんが…。昨年来た山口(博)先生が仰っていたんですが…。また、道長でも、『御堂関白記』を読んでいますと、“まだら馬”っていうことを気にかけていますよね…。例えば、慣例である上賀茂神社へ神馬を奉納した際の参詣の折〔長和4年(1015)4月23日条〕、他社(松尾社)



の神馬が「鹿毛の駿であった」と、突然の如く、その日の日記に書いたりしていますね。『御堂閑白』を全注釈した山中裕氏は、この突然の記述を大変いぶかしがっていますが…。それほど、当時の貴族の中では、体毛がまだらな、体格も優秀な力の強い馬は重宝に思っていたのだと思います。ただ、今日でいうサラブレッドとかいう、そういう馬ではなくて、私が思うには、逆に農耕馬に近いような、少し在来馬にしては大き目の、体毛がな斑の馬だったんじゃないかな…と想像しています。

また、できれば、“尾駿の駒”というのを再現できたらいいなとも思っているんですが、ルーツは南部馬になってくるんじゃないかと思ったりしているんですけど…。 “いけづき”ですね…。 “いけづき”は当時、規格外の馬だったと思うんですけど、それに近いような馬を、こちら側で生産していたんじゃないかな？という感じで思っているんですが。ただ、“尾駿の駒”っていう絵が、後世描かれているわけではないので、あくまでも、その特徴的な事でしかイメージできないんですけども…。

それと、“まだら”ってことなんですけど、我々はどうも、白馬のような、戦中、天皇陛下が乗った白馬がすごく格好良いように見えてたんですが、どうもそれが思想的に、“まだら”とかというものの方が、自然の中ではそういう、石帯もそうですが、全くの真っ白いものより、景色があるもの…。そこに、精神性を求めていた…。

例えば、宮中の神楽歌の中にある「其駒」っていう歌の中にも、（神様の乗りものとしての）“まだら馬”って出て来るんですよ。だから、そういうふうな神聖性かつ能力の優秀な馬だったんじゃないかなとイメージしているんですが…。

会場(C)：今のことに関連して、笑われるかも知れませんが、“尾駿”という地名ですから、単純に、「尾っぽの色が駿だったのかな？」と、こんな子供じみたことを考えたんです。



尻尾は、私も馬に関係しているので、いろんな馬を見ています。けど、肌の方ですよ。普通、“ぶち”と言うのは…。尾っぽがまだらという毛色をした馬って、私、見たことが無いんですよ。で、“尾駿”という名前は、地名として、馬と関係なくあったんでしょうか？ それとも、やっぱり尾駿の駒からの歴史的な関わりで、出てきたものんでしょうか？ だとしたら、「尾っぽが駿だった」ということか考えられませんか？ 何か、私、見たことのないのにバカげた話でスママセン…。教えてください。

高澤：二つ目の質問ですが、引き続き、相内さん、よろしくお願いします。

相内：その…、バカげた話っていうよりも、それが永遠のテーマみたいなところがありましてですね…。『村史』にもですね。結局、“尾駿”じゃなくて、小班という意味での「小さい駿になっている名馬が出たところが有名になった」んじゃないかと、（『村史』執筆者の）盛田稔先生が書いて下さっているわけですけども、私も、尾っぽが駿と言うことはないと思います。それと、「尾駿」とは、後世、“尾が駿”と付けたんだと思うんですが、本来、和歌ではひらがなで「をふち」で、「～を」の、こっちの「を」ですよ。充てた字は「尾駿」になってるんですけども、その「尾駿」がこれは、前にもお話したんですが、いつの

時点で「尾駁」として、地名として付けられたか？ということも出て来ますので、また、別個なんですね…。

ただやはり、思想的なものと、そういうふうな、何ていう一んですかねえ…。そういうふうな馬が出たところが有名になっという話はですね…、二者同一しないという学者の先生も居れば、いろいろと難しくてですね…。やはりそこは、永遠のテーマ的なところはありますよね…。(苦笑)

高澤： 入間田先生、長尾先生は、いかがでしょうか。

入間田： 確かに、尾っぽが駁の馬は無いので、私自身は、体毛が「小さい駁」ね…。「小駁」と呼んで、それがいつの間にか、「尾駁」になったのではないかなあ…と思います。

それから、やっぱり、今、お話があったように、中世の神馬というのは、“まだら”ってうか、葦毛の馬ってうのが、神様が乗ってくる馬になっている。その葦毛ってうのと“小駁”ってうのは近いのかなあ～ってう感じで思っているんですが。

相内： 私も、そうなんじゃないかと思えますね。これまでのフォーラムを続けてきた見解からも、そのように感じますね…。

高澤： ありがとうございます。では、次の質問に移りたいと思います。

会場(D)： 前の方の質問の、馬の体格に関する事なんですけど、ずっと前々から、素人で、笑われるような質問なんですけども、こっちの方、北国の人たちは、体格も良くてあれなんですけども、普通の標準の日本人というのは、例えば、平泉三代のミイラの検査とかやった時に、身長はそんなに大きい方ではなくて、むしろ、平均的な日本人の体格だということで、そういう普通の日本人が、そういった大型の“いけづき”とか“するすみ”のそういう体格の<sup>※3)</sup>サラブレットの血が入ったような馬を、乗りこなせるものかどうか？とても前から疑問に思ってたんですけども…。笑われるような質問なんですけども、よろしくお願ひします。

※3)…「盛田稔説」。北からの「馬の海の道」でやって来た、大陸のアラブ種と日本在来馬とのかけ合わせではないかとする説。

高澤： ありがとうございます。このお答えは、どなたにいたしましょうか？

相内： あのー、入間田先生、逸話で、頼朝の話にありませんでしたかねえ？ 東国の武士は、“馬乗り”で自慢してますけど、頼朝曰く「お前らは、陸奥国の馬を乗りこなせないんじゃないか」みたいなこと言って、叱咤激励したってう話がありませんでしたかねえ？

入間田： えー、当時の馬っていうのは、二歳の牡馬だけで、牝は初めから入らないですね。牝が居ると、途端に、暴れてダメになるもんだから。去勢してませんから…。それで、去勢もしていない、それから蹄鉄もしていない馬っていうのはものすごく気が荒くって、乗る人を選ぶんですね。だから、人馬一体なんて言いますが、馴れた人しか乗せない。だから、旧陸軍が、騎馬隊をつくる時にもものすごく大変で、急に去勢するとか、あるいは蹄鉄を打つということになって、それから、品種改良をすることになるんですけども。それ以前の馬っていうのは、本当に大変だったみたいですね。ですから、背は低いんですけども、乗せてくれるまでに、ものすごく、何ていうかこう、精神的に通じないというところ、乗せてもらえなかったというところはあるみたいですね…。お答えになっているかどうか、分かりませんが…。

高澤： はい。ありがとうございます。それ以上、補足はございますでしょうか？



実は、私も、昨年も叱られまして、この馬の体高の件で、司会の分際も弁えず発言したら、先生から怒られてしましまして、大炎上してしまったことがあるんですが、で、一つだけ、お答えさせていただきたいことがあるんですが、馬の体高というのは、“き甲”という部分がございまして、肩の辺りから地面までの高さを計ります。で、サラブレッドですと、そのき甲までの高さは、160センチから170センチ。大きなものでは180センチぐらいの非常に高いものです。

それにくらべまして、日本の在来馬っていうのは、140センチから150センチ。そういった大きさだったということです。したがって、当時の日本人でも、当然、乗りこなせただろうと思っております。名馬というものが、一般的に、140センチから150センチよりも大きかったのかどうか？ そこら辺りははっきりとはしていない…と、言ったところで間違いがないでしょうか？ はい、ということで、すみません。そうさせていただきます。

入間田： ちょっと、いいですか？ 私の方で、実は、皆さんに教えて欲しいことがあるんですけども…。

さっき、おしゃべりで申しましたけども、尻屋崎を回ってね、津軽海峡に入るのは大変だと言ってますけど、本当にそうなのか？っていう事とかね。あるいは、海から小川原湖に入って、そこから七戸に陸揚げして、それから野辺地に行ったっていう話が、まあ、論文にはそう書いてあるんだけど、私は、本当かな？っていうふうにも思うんですよ…。その辺のところで、何か地元で、昔、小川原湖から七戸に陸揚げして物を運んで、積み荷を上げ下ろしした場所があるとかね。そういった話とか、あるいは、いやあ、尻屋の方を回るのは大変だとかっていう話とかは、多分、皆さんの方がご存じの方が多いと思うんですけども、是非、その辺のことを教えて欲しいなあ～と思って、実は今回、伺ったんですけども…。

高澤： では、お答えください。

相内： え、皆さんにお聞きする前に、私も、古代の舟の航行、特に太平洋側ですね、どういうふうにして行ったのかな？…ということ、早稲田大の川尻秋生先生に聞いた時に、やはり、湊、湊を伝って行くんですね、沖に行くんじゃないで…。それで、今日の先生の話聞いた時に、八戸まではあって、小川原湖とかがあって、それより北に主要な湊が無いというのは、やっぱり厳しいんですかねえ？ずっと航行するのは…。私はそう考えるんですが、皆さんで、その辺の知識がある方が居りましたら、是非、教えていただきたいんですが…。

高澤： 会場の皆さんで、いかがでしょうか。先生のご質問に対しまして…。

会場(E)： 三沢市の川村と申します。下北の尻屋に6年、住んでおりましたので、尻屋の厳しい自然を6年間、体験しておりました。それから、私、「自然」が専門ですから、あちこち、砂丘を調べたり、埋没林を調べたり、いろんなことをしましたけども、尻屋崎から小川原湖まで、岩礁地帯があるのは、「尻労(しつかり)」と「泊」しかないんです。「泊」も昔、船がようやく泊まるってくらいで、「泊」っていう名前があるくらいなものですから、その後は、海流と風。津軽海峡の風っていうのはものすごく、普通の舟、帆船、木造船は、まず、通ることは大変なんです。



それから、海流と暗礁が多いものですから、この灯台ができて150年間の間に、約150隻以上、座礁、沈没しております。それで、野辺地以降もすごいですから、あの岬を船が行き来するというのは、大変なことで、江戸時代、ようやく東回り航路とか、西回り航路とかできた時に、ようやく大きな船が通り始めたというのが現状です。

そういう意味で、実は、私も『青森県史』に「自然」編を書いたんですけども、「津軽海峡の風」編を書きたかったんですけども、大学の先生方とやりあって、結局は外された思いがあります。すごくて、冬に小屋が飛ばされたり、軽自動車も尻屋崎の分かれ目のところでひっくり返ったりするんですね。さらには、小石が高さ30センチくらいで飛んで歩くんです。そのくらい、海峡風のすごいところでね。6年間住んで、いろいろ大変でした。もちろん“寒立馬”とか、そういういろんな現象とか、共産部落等の伝説とかがあるくらい尻屋崎ですから、調べてみるともっとおもしろいかなと思います。

それから、先ほどの「小川原湖を通過して七戸への航路」というのは、実は私も一つ、唱えている説があります。それは、南北朝の戦いで、南朝の方の根城南部氏が持っているお城が、根城南部と七戸のお城だけなんです。ですから、その二つの航路を結びつけるのは、高瀬川から入って、小川原湖に来て、小川原湖の、おそらく明日行く「八幡館」辺りに船の船着き場を造りまして、そこでさらに川舟に乗り換えて、小川原湖、七戸川を上流にさかのぼって行く…。ですから、上北町、七戸川を河口から七戸までの間に、小さな砦と言いますか、館って言いますか、そういうのが四つ、五つ、ずうっーとありまして、最後は七戸のお城に入って物を運ぶというのがあります。

今、「仏沼」っていう名称が無くなって、埋め立てられていますが、ついこの間、百八十、二百年前までは、「木崎野」の古牧の地図の中には、船の船溜まりと、そういう記録があるくらいですから、おそらく、かつては、安倍氏も使っていたんじゃないかな

あ〜とっていました。

今日の先生のお話で、南北朝時代以前にも、ひょっとしたら使っていたという説を聞いて、楽しい、おもしろいお話を聞かせていただいたなあ〜とっております。

どうも、ありがとうございました。

相内： いや、こちらこそ、ありがとうございました。

高澤： それでは、東海大学の松本先生は居られましたら…。

入間田： 松本先生に伺っていい？

高澤： どうぞ、どうぞ。はい…。

入間田： 馬飼の人たちが、信州とか、あるいは甲州、そっちの方面からこっちの方に移住したっていう話、私も非常に魅力的なお考えだと思っているんですけども、そうすると、彼らがたどってきたルートってのはね、七時雨峠を越えてくるコースになるのか。それとも、海の道とか、いろいろあると思うんですけども、そこら辺りの、彼らが、信州なり、あるいは甲州なりの方面から、こっちの方にたどってきたルートっていうのは、具体的にどういうふうにお考えなのか？ ちょっと伺いたいなあと思ってたんですが…。

会場(F)： はい。ありがとうございます。



まずは、馬と一緒に来たと思っておりますから、海ではなくて、山の方を歩いて来たかと思っています。で、馬は毎日、食べていかないと生きていけませんので、馬のエサが生えているところを歩いてきたんだと思っています…。

そうすると、笹が生えているところですね。なので、クロボク土地帯と言いますかね。馬が道を教えてくれるというような状態で、しかも、人が住んでいないと言いますか、信州だとか、上州だとかでも牧場はたくさんあったわけですが、その牧場ももう枯渇したというか、他の人が住んでますから、もっとたくさん、だれも使っていないような牧場を開発したいと思って来るとすると、北上して行ってですね…。すると、日本国の外に出て、それでもだれも使っていないという、六ヶ所の辺りとかですね。そういうところに来たんだろうな…と、私は思っております。

で、まあ、通過するところとしては、この羽柴氏が作成した図の道も一つだと思えますし、それから、この道自体は、私は正確にわからないでいたんですが、六ヶ所に入る前に、鹿角の辺りで、あるいは津軽の辺りで一度、東北北部化した人たちがですね…。それから、六ヶ所に入って来たと考えられますが、また、この道順と関係なく、文化の順番としては一度、鹿角方面、あるいは、今は青森市になりましたけど、旧浪岡町辺りに入って、そういうところで、東北北部等の自然環境とかを知ってから、だれも住んでいない、しかも、笹だとか、そういう馬の好むイネ科の植物が豊富にある、そういうと

ころに来たんだろうと思います。まあ、その時は、私、道はどこを通ったとかまで考えていませんでしたが、クロボク土や笹のあるところに来たんだなと思っていました。

相内： えー、6年間、フォーラムを開催させていただきまして、結構、著名な先生方にもお越しいただいて、この「尾駁の駒・牧」というテーマに挑んで参りました。

先ほども、冒頭でお話しましたように、お蔭様で、今年、フォーラムも含めて、来年の秋頃には、講師先生方、執筆による、『尾駁の駒・牧の背景を探る』という本の刊行にたどり着きそうで、刊行される運びとなっております。

非常に、画期的な事だと思っております。少し、学術的ですが、もっとこれ以上に、中央にも発信できるんじゃないかと、大変うれしく思っている次第であります。

また、いつの日か、フォーラムを再開できるように頑張りたいと思っておりますので、その際には、是非また、ご来場いただければと思っております。

本日も、長時間、お付き合いいただきまして、誠にありがとうございました。

(会場、大拍手)

高澤： 以上をもちまして、「パネルディスカッション」を終了いたします。ご登壇の皆様、ありがとうございました。

## 「古代・小川原湖と“尾駁の牧”

### － 人・物・情報の交流について考える －」の感想

「尾駁の牧」歴史研究会 鈴木 浩

今回で、一応最後となるフォーラム。

「雅楽・みちのく楽舎」による華麗なる舞楽演奏から今年も始まりました。

平成 24 年度に始まりましたこの歴史フォーラムも、早いもので6回目を迎え、六ヶ所村当局はもちろん六ヶ所村まちづくり協議会を始め、協賛並びに後援をいただきました関係各機関・関係者の皆様のご協力を得て、「よくまあ、ここまで続けられたなあ」というのが、第一の感想です。本当にありがとうございました。

今回は、瀬川滋氏並びに長尾正義氏のお二人による基調報告と入間田宣夫先生に基調講演を行ってもらうことができました。現在、自分が勤務している学校の側にも10世紀から11世紀頃の「内蛭沢蝦夷館遺跡」や「白旗館遺跡」があります。

昨年赴任してから、町史や発掘報告書を読んでおりました。その遺跡からは、五所川原産の土師器片や佐渡産の須恵器片、鉄滓や鉄塊、羽口等が出土しています。

近くには製鉄炉跡(?)が出土している「鳥口平遺跡」もあり、「秋田や津軽の方から移住してきた人たちなのかなあ」と考察して楽しんでいました。

ですから、今回の「二十平(1)遺跡」と三沢市の「平畑(1)遺跡」のその特異な遺跡事例について基調報告をしていただき、古代のこの上北の地に「どんな人々が住んでいたのか？」と、ますます興味が湧きました。

また、入間田宣夫先生の基調講演「尾駁の牧並びに糠部の駿馬をめぐる、人・物・情報の交流について」では、小川原湖を含めた海岸ルートが存在を明らかにし、中世「糠部の牧」もしくは、それ以前の「尾駁の牧」地方について、詳細に検証してもらいました。

やはり、先ほどの考察ではないですが、「秋田・津軽ルートや太平洋八戸・小川原湖ルート、糠部七戸ルートがあったのかな」とか、「人・鉄・馬が関わる歴史があったのではないかと、より一層、この地方の古代の歴史が知りたくなりました。

これからも六ヶ所村・上北の古代の歴史について、「自分なりに調べてみたい」と思いました。

## 「シリーズ最終回にふさわしいフォーラム」

六ヶ所村「尾駁の牧」歴史研究会 佐藤 仁

歴史フォーラム2017は、「尾駁の駒・牧の背景を探る」ことを目指して、今回、開催が6回目となるこのシリーズの最終回にふさわしいフォーラムになったと思います。

基調講演をされた東北大学名誉教授の入間田宣夫先生は、「“尾駁の牧”“糠部の駿馬”をめぐる、人・物・情報の交流について」と題して、これまで5回のフォーラムでの成果を踏まえて、個々の論点を結びつけていただき、先生の示した方向性については、これまで以上に納得できました。

「尾駁の牧」や「糠部駿馬」の存在は、人・物・情報の交流の広域的かつ活発な展開の賜物にはかならないと結論されていることに、平安時代へのロマンを掻き立てられました。

また、「“尾駁の牧”が七戸の辺りにあったことについては、ほぼ確実」とまで言っていたきました。「七戸立」ということでしょうか、名馬には「塩」が不可欠だといわれています。

それは直接食する「塩」だけでなく、「塩気」を含んだ牧草が名馬を育てるには必要不可欠だということではないでしょうか。六ヶ所には海があり、丘陵地帯です。六ヶ所で育った駿馬が「七戸立」として平安京に運ばれていったということは充分考えられます。

私事になりますが、今からちょうど20年前、上北郡六戸町役場に勤務したことがあります。町では、1993年から「戸のまちの起源を探る」と題してシンポジウムを3回開催し、その成果を「北辺の中世史」（名著出版発行）として出版しています。

基調講演をされた入間田先生は、その時も講演をされ、また出版に際しては、寄稿下されております。今回、論稿を読み返し、たいへん懐かしく思った次第です。

先生、ありがとうございました。



平成29年度六ヶ所村「尾駁の牧」歴史研究会  
「六ヶ所村 歴史フォーラム2017」アンケート集計結果

1 来訪者の概要 (受付名簿から)

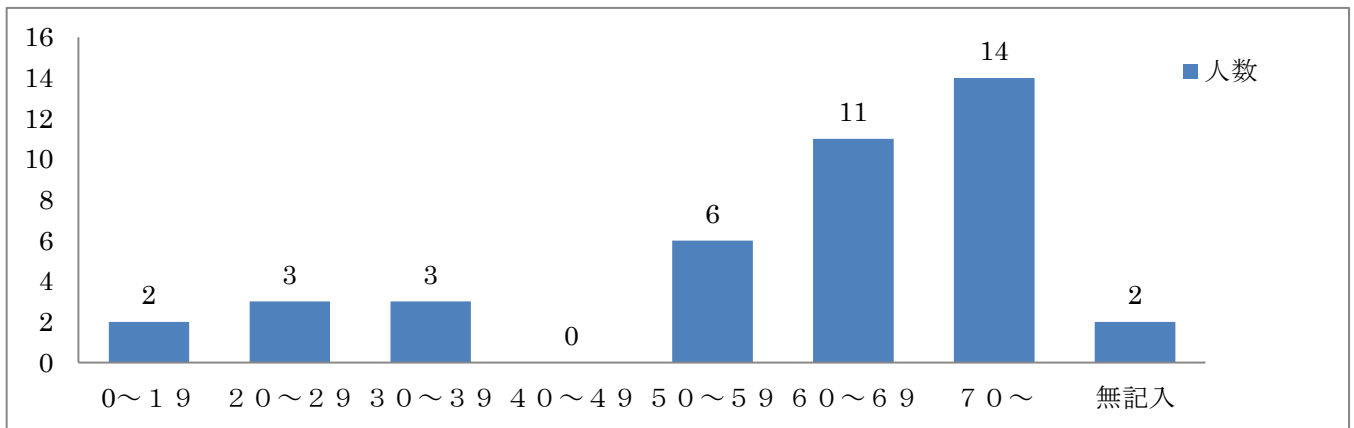
(1) 来訪者数 計 98名 (一般参加者数 村内 名 村外 名)

2 アンケートの質問項目と集計結果

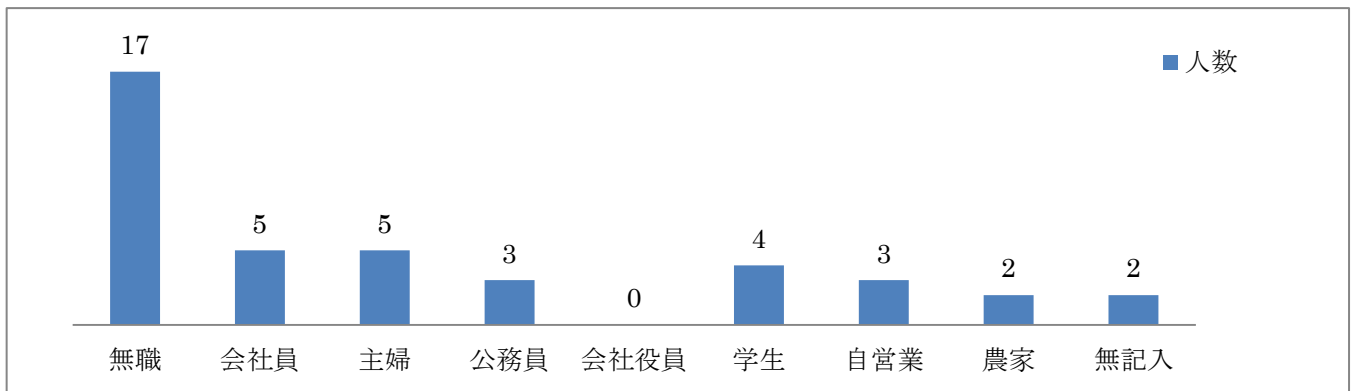
※ 回収合計枚数41枚 (昨年30枚 一昨年35枚)

(1) 性別 (男29名(昨年19名), 女12名(昨年11名))

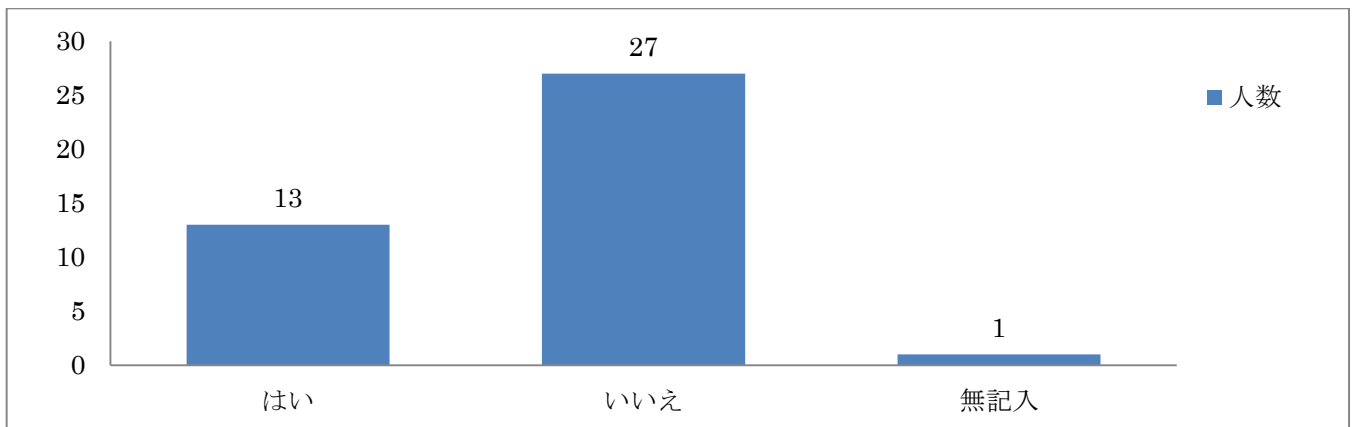
(2) 年齢 ( 歳)



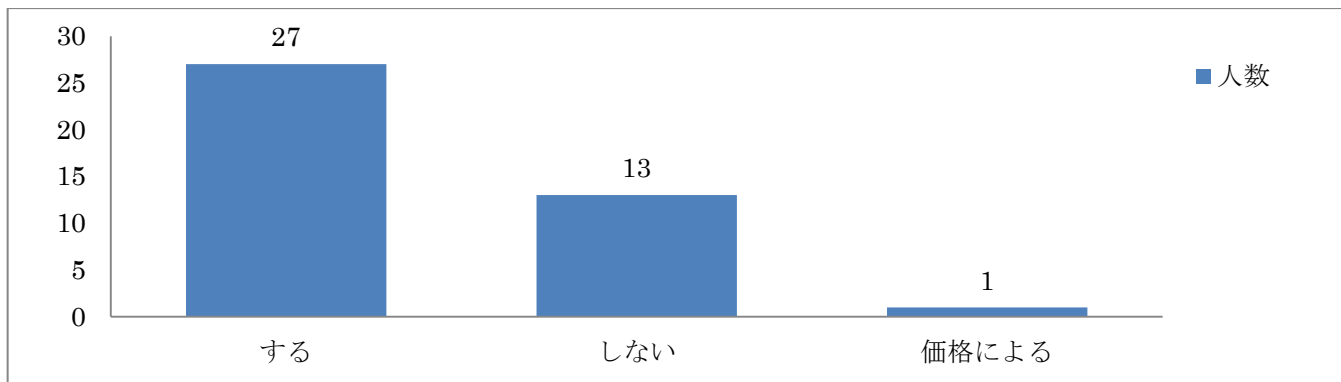
(3) 職業 ( )



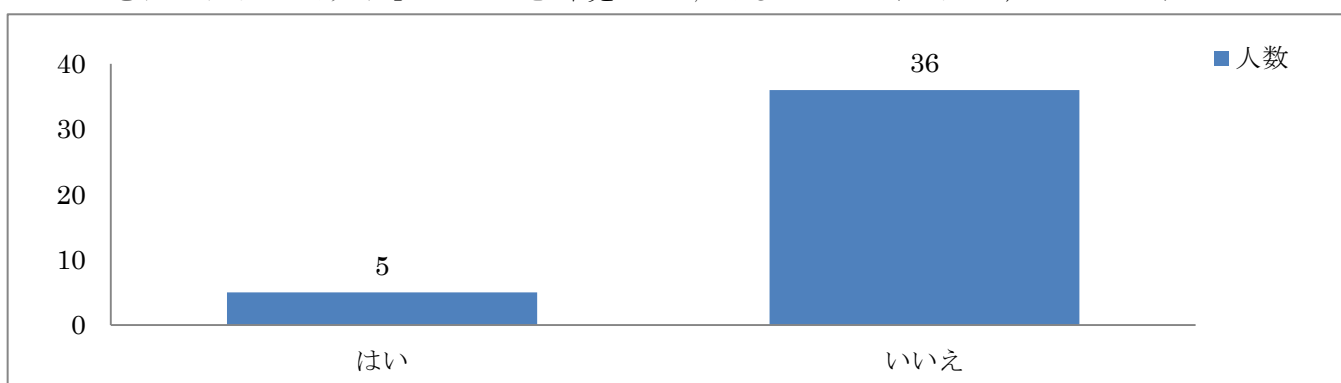
3 歴史フォーラムを続けてほしいですか? ( はい, いいえ )



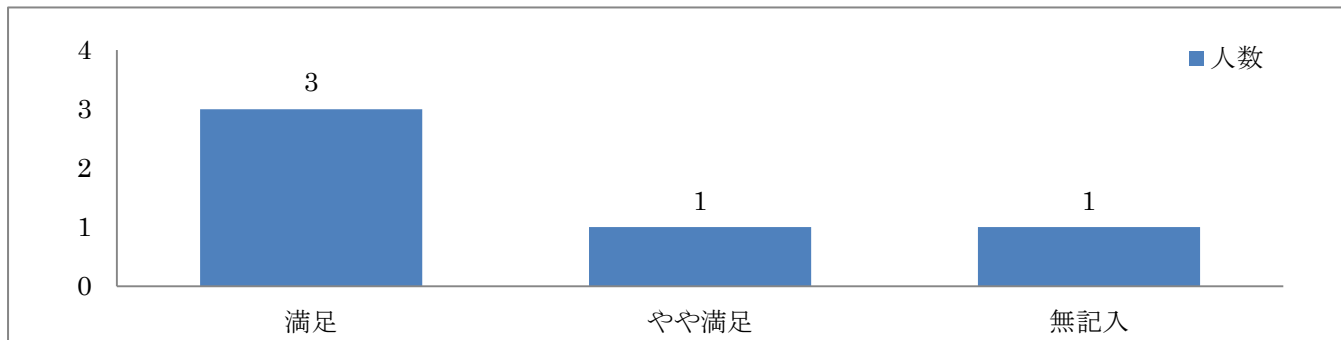
4 これまでのフォーラムをまとめた書籍は購入されますか？（する、しない）



5 「尾駁の牧歴史研究会」のHPを御覧になりましたか？（はい、いいえ）



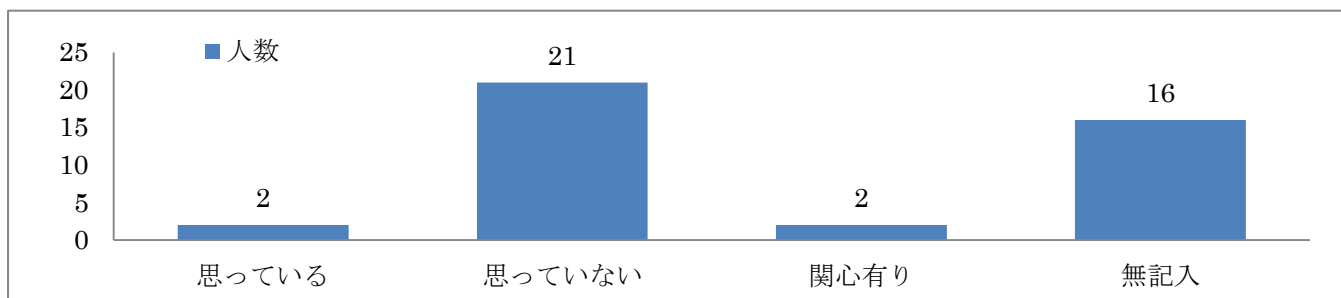
6 「尾駁の牧歴史研究会」のHPの感想は？（満足、やや不満）



7 「尾駁の牧歴史研究会」のHPの御意見・ご感想を。

(1) もう少し、積極的に、アピールしてほしい。（新聞やTV等で）

8 今後、本歴史研究会に入会したいですか？（思っている、思っていない、無記入）



9 雅楽演奏及び基調講演並びパネルディスカッションの内容について

項 目	評 価		
	3	2	1
	大いに満足	興味深かった	関心を持った
雅楽演奏について	2 2	1 1	4
基調報告①「おつ湾東岸域の環濠集落・二十平(1)遺跡を中心にして」	1 3	1 7	8
基調報告②「三沢市平畑(1)遺跡の特徴について」	1 3	1 6	8
基調講演「尾駱の牧・糠部の駿馬をめぐる人・物・情報の交流について」	2 5	1 0	3
パネルディスカッション	1 2	1 2	2

その理由を具体的に記入ください。

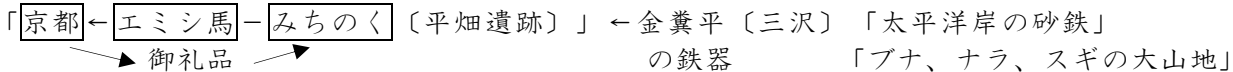
【雅楽、神楽】

- ① 普段見ることのない雅楽に感動。音色といい舞といい、魅せられました。
- ② 雅楽演奏を見てとても感動した。

【基調報告①】

- ① 現場からの報告は、実に興味をそそる内容でした。集落の形態、土器など。
- ② 基調報告Ⅰで発表したパワーポイントの図が見えにくかった。
- ③ 基調報告Ⅱには、不意を突かれたような衝撃を受けた。
- ④ 出土遺物、遺構から物語るものを明らかにしてくれた。
- ⑤ 野辺地～図表をうまく使ってわかりやすく…。(三沢市)
- ⑥ 地域に詳しい。

【基調報告②】

- ① 出土品にとっても感動いたしました。緑釉陶器、鉄鈴等、ロマンをくすぐられました。
- ② 三沢～緑釉陶器＋鈴（馬の鈴）＋農耕馬活用鉄器の存在から、  

- ③ まだ、馴れなくてウブな感じ。

【基調講演】

- ① 奥の深い話に目が点になりました。
- ② 基調講演は、大変興味を持てる内容でおもしろかった。
- ③ 基調講演は少し論が前後にめまぐるしく変わり、ついていくのが大変だったが、これまでの疑問のいくつかが解けた思い。(六戸町)
- ④ 北緯40度から北の北奥が占める歴史的立場をあらためて意識させてくれた。
- ⑤ 例年以上の参加者でとてもうれしく思いました。知人(弘前市在住)も入間田先生が講師とのことで駆けつけてくれました。(平内町)
- ⑥ 「馬…いつどこからどうやってこの地まで??」すごい! 私にとって、最新情報ばかりでした。「一つの物をきっかけにたどる」、おもしろい!! 太平洋ルートが小川原湖→七戸とつながっていくなんて! 一戸→九戸のことだけでなく、各々の牧、馬印についても言及していただいたことも、すごい!(六戸町)
- ⑦ 物流の…新学説? 目からうろこ! 北の端と卑下することがないんだ! 中央の論理を鵜呑みにしてはいけないとつくづく思った。もう少しきわめてみたいと切に思った。
- ⑧ 物流について、平泉が中心ではなく海のルートで直接津軽に来ることもあった。(弘前市)
- ⑨ 「三陸沿岸を北上する海の道」についての話が興味深かった。特に小川原湖→七戸→野辺地

→北海道（青森）の説は新鮮だった。（青森市）

- ⑩ 入間田先生の深い学識（故郷南郡、碓ヶ関村まで出たのは嬉しい驚き）。温かい人柄。（青森市）
- ⑪ おつ湾と太平洋をつなぐ運河が昔から考えられていたので、それより、やや南の小湊→野辺地→七戸川→小川原湖→太平洋という経由は、より現実的であったろうと考えられる。
- ⑫ 興味深い話でした。特に、南からではなく、北からの作り物が伝わった事です。

【パネルディスカッション】

- ① 会場の出席者の質問が盛り上がらなかった。
- ② パネルディスカッションは、「尾駁の駒」の具体的な像や乗りこなせる？など、興味深い質問が多かった。

【その他】

- ① 口調がよい。
- ② 専門性が高く、しかし平易にお話しいただき、興味が深まりました。
- ③ どの項目についても勉強になりました。
- ④ 中世のお話も伺えて参考になりました。糠部の馬をどのようなルートで都に運んでいたのが課題です。（南部町）
- ⑤ 初めての参加でこれまで得られなかった情報・知識となりました。たいへん興味深かったです。（六ヶ所村）
- ⑥ 今回のテーマの核心に迫るには、もう少し資料・発掘と検討する時間が必要と考える。（奥州市）
- ⑦ 7世紀以降10世紀あたりまでの遺跡として、八戸やおいらせ町の古墳群などはよく知られているのに、今日紹介された遺跡についてはほとんど知られていない。  
時代的に新しいのに…。いろいろ興味が湧いてきます。（五戸町）
- ⑧ 今まで聞く機会の少ない人たちの話を聞いて全体的に満足できるものだった。
- ⑨ 青森県外で生まれて生きていますが、そんな私でも驚きを感じられる内容でした。（19歳）
- ⑩ 各講師からのお話が時代、歴史で深く、専門的で理解できる所とできなかった所もあり、今後も勉強が必要である。（おつ市）

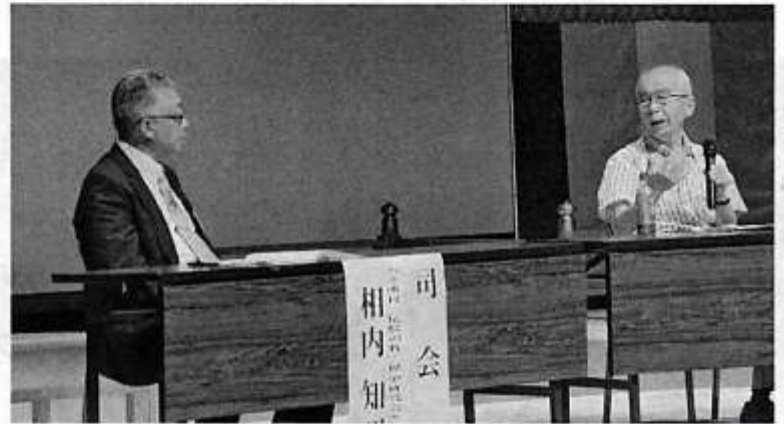
10 その他、本日の「歴史フォーラム2017」についてご意見ご感想がありましたらご記入下さい。

- ① 基調報告がややわかりにくかった。
- ② 基調報告①と②は、「尾駁の牧・駒」との関連があまりないと感じました。六ヶ所村歴史フォーラムに初めて参加したので、異なる趣旨でプログラムを考えられているのであればご容赦願います。（山本）
- ③ 今回は入間田さんの講演目当てにきましたが、期待に違わぬ内容でした。また、瀬川さん・長尾さんの報告から新たな発見もありました。なお、余計な一言かも知れませんが、平安時代の馬の体格は、今のようなサラブレッド型ではなくポニーや寒立馬のような型だと聞き及んでいます。  
理由としては、合戦時代は武具を着けるわけで、重さは20～30kg以上になるそうです。サラブレッド型は足が細くとても耐えられないでしょう。もう一つの理由として、源平合戦中畠山重忠が馬を背負って山を下ったとのことで、ポニー型だと可能なようです。  
いずれにしろ体格や当時の名馬云々については、ばんえい競技の馬を想像すればわかりやすいのではないかと考えています。（奥州市）
- ④ 北緯40度以北の話が良かった。

- ⑤ 入間田先生、高橋富雄先生らの参考図書を読んで、これまで不明疑問に思ったことが官軍の北上、物流、航路、大道らの資料によって少し理解を深めた。しかし、「尾駮の牧・糠部の馬」そのものの深まり、京都、鎌倉、平泉での馬の評価、奥州藤原三代（1150年前後）との関連を明らかにしなければ…。文献研究も遺跡遺物研究をして今後に期待したいものです。何年か休んだら…、将来、また再開を期待したい。（三沢市）
- ⑥ フォーラム…。青森県人の一番弱い点。話し下手。会場の質問者はもっと話し方の勉強が必要。（青森市）
- ⑦ 初めての参加で、午前の報告とフォーラムのテーマとの関連を理解するのに苦労しました。しかし、入間田先生とパネルディスカッションによって「ロマン」と言っている意味も理解できました。このロマンから裏付けに基づく歴史の1ページにできると良いですね。日本の東北の文化の大きな流れの一つとしてとらえました。書籍ができましたら、さらに勉強させていただきます。（六ヶ所村）
- ⑧ パンプに地図がほしい。（青森市）
- ⑨ 来年できるろっかぼっか地区の道の駅に「尾駮の駒」のイメージ像を建立してはどうでしょうか。（六ヶ所村）
- ⑩ 尾駮の牧が本当に実存したということを是非とも証明してほしいです。（三沢市）
- ⑪ 「北前船」でもわかるとおり、昔は陸路より海（水）路の方がたやすかったことは考えられる。小湊→野辺地という経路は大いにあり得る。その意味で七戸の牧は、好条件であったであろう。水路を考えると七戸→八戸という番号付けも理解できる。核心に触れてきたところで終わりになるというのは惜しい。次の、より広範な展開が考えられてしかるべきであろう。（六ヶ所村尾駮）
- ⑫ 松弁当（「奥の牧」）の充実ぶり、皆感動した。豊富、美味しい!! うす味で。3回しか参加できなかったが、今回が一番聞き応えがあった。本の発行を楽しみにしています。長い間、ありがとうございました。もっと続けてほしいですが…。
- ⑬ 初回から続けて聴講しております。六ヶ所村の村名にちなんで、今回で一区切りを付けるのかなと勝手に解釈しております。是非、来年度からパートIIがスタートされますことを願っております。感謝!!。（平内町）
- ⑭ 6回のフォーラムの内、今日で2回拝聴させていただきました。格調高いフォーラムは、なかなか聴けるものではありません。（様々の要素で）六ヶ所ならではの催し物と有難く思っております。日曜日の開催なので、他の行事と重なり2回しか参加できなかった事を残念に思いますが、本当にありがとうございました。又、続けられることを希望いたします。
- ⑮ 是非、何かこれまでのフォーラムに続くものを、形を変えて、いつかまた見せていただきたい。（五戸町）
- ⑯ これまでありがとうございました。実にすばらしい催しで、毎回感動して帰りました。歴史研究会の次の取組みに期待しております。（六戸町）
- ⑰ 6年間の継続した研究発掘を提示してくれたことに感謝いたします。
- ⑱ それにしても、六ヶ所村! すごいですね。すぐれた知の講師によってたどる歴史をフォーラムにした六ヶ所村。いろいろ知る楽しみを味わいました!! ありがとうございました。相内会長さん、事前に個人的な案内をいただき、ポスターとコメント、昨年と二度もいただきました。ありがとうございました!! おもしろかったナー!!（六戸町）
- ⑲ このフォーラムがシリーズで行われたことを知らず、今回の最終回に出席して大変満足しました。（おつ市）
- ⑳ 興味深い内容で良かったです。今まで6年間、どうもお疲れ様でした。どうもありがとうございました。
- ㉑ 自分自身が勉強不足なので質問もできませんでした。もう少し学びたかったです。有難うございました。
- ㉒ 昨年は都合で来られなかったんですけど、毎回、良い講演ばかりでした。また、お会い出来るのではと、欲張って希望しています。

# 上十三むつ下北

## 村歴史フォーラム一区切り



入間田宣夫さん(右)と相内知昭会長らによる  
パネルディスカッション

### 「尾駮の駒」テーマ 冊子刊行へ

#### 六ヶ所

古歌に詠まれた「おぶちの駒」の産地が六ヶ所村だったかを検証する、

村歴史フォーラムが8月27日、同村のスワニーで開かれた。今回は、2012年のフォーラム開始当初からテーマとしてきた「尾駮の駒・牧の背景

を探索」のシリーズ最終回。専門家や大学教授が名馬産地の実在の可能性に迫った。

フォーラムは、村「尾駮の牧」歴史研究会(相内知昭会長)の主催。6年にわたり、専門家らが文学や考古学などの分野で持論を展開してきた。今回は、青森県考古学

会副会長の瀬川滋さん、三沢市教委の長尾正義さん、東北大名誉教授で一関市博物館館長の入間田宣夫さんの3人が講演。パネルディスカッションも実施した。

入間田さんは講演で、平安時代の小川原湖周辺の人、物、情報の流れを中心に説明。その上で「尾駮の牧の存在を明らかにするためには、政治的(軍事的)なルートだけでなく、商人や僧侶によってつくられた物流を明らかにする必要がある」と述べた。

相内会長は6年間を振り返り「実在の可能性はあるという知見は得られた」とし、今後も検証を続けながら村内外に発信していくことを強調した。

フォーラムは今回で一区切りとし、来年以降の実施は未定。同研究会は来年秋ごろをめどに、これまで参加した講師の寄稿を集めた冊子を刊行する予定だ。(桑田友人)

2017年(平成29年)8月20日(日曜日)

### インフォメーション

#### 27日、六ヶ所村歴史フォーラム

六ヶ所村「尾駮の牧」歴史研究会(相内知昭会長)は27日、同村のスワニーで「六ヶ所村歴史フォーラム2017」を開催する。今回は12年からのテーマ「尾駮の駒・牧の背景を探索」のシリーズ最終回で、小川原湖周辺での人、物、情報の流れを軸に「尾駮の牧」実在の可能性を探る。

午前10時半開始。青森県考古学会副会長の瀬川滋氏と、三沢市教委の長尾正義氏が基調報告を、東北大名誉教授で一関市博物館館長の入間田宣夫氏が基調講演をそれぞれ行う。

このほか、パネルディスカッションを実施。雅楽演奏や同村泊地区の郷土芸能「泊神楽」も披露される。

入場無料。プログラムなど詳細は同会のホームページ(obuchinomaki.com)で確認できる。問い合わせは、相内知昭会長＝電話090(3752)0935＝へ。

# 「名馬の里」ロマンに迫る

六ヶ所村は平安貴族の歌に詠まれた名馬の産地「尾駁の牧」だった。この説を検証してきた歴史フォーラムが6年目の今年、シリーズ最終回を迎えた。フォーラムは、「尾駁の牧」歴史研究会(相内知昭会長)が各分野の研究者を招き、説を補強する考察を重ねながら、歴史のロマンを追求してきた。来秋には講師たちの論考集を出版する予定で、相内さんは「村民が地域の成り立ちと文化を見つめ直すきっかけになってほしい」と期待を込める。



8月のフォーラムで、「尾駁の牧」について意見を述べ合う相内さん(左)と入間田さん(右)

(加藤景子)

今年のフォーラムは8月末に開催。4時間半に及ぶプログラムで、県内外の聴衆約100人が、東北大名督教授で一関博物館長を務める入間田宜夫さんの講演などに耳を傾けた。

フォーラムは2012年から6回にわたり、考古学、歴史学、文学の各分野の大学教授や研究者たちが、馬にまつわる歴史、「尾駁の駒」と呼ばれるまだら模様の馬を詠んだ和歌などについて解説。仮説と最新の研究成果との間を埋めるピースを持ち寄ってきた。

駿馬の産地として有名だった陸奥国と、京の都が馬の交易でつながっていたことは文献などから明らかになっている。最大の焦点は、「尾駁」の地名が唯一残る六ヶ所が

## 交差点

## 6年目で最終回

六ヶ所「尾駁の牧」歴史フォーラム

「尾駁の牧」だったかどうかだ。

フォーラムや村史の内容を総合すると、平安時代、馬を飼う人々が六ヶ所に移住し集落を形成。同じ頃、京都では後撰和歌集に「尾駁の駒」が初めて詠まれ、それ以降、身分の高い貴族ほどこの題材を好んだ。当時、まだ馬は時の権力者に珍重されていたという。源頼朝が愛用した名馬「いけづき」は「尾駁の牧」から出たと推定する説もある。

同村の表館遺跡で出土した石帯(平安貴族が身に着けるベルトの装飾品)、野辺地町の二十平遺跡や三沢市の平畑遺跡で見つかった緑釉陶器(緑色の上薬をほどこした陶器)は、中央とのつながりを示す有力な遺物とみられている。

相内さんは十数年前から、県内外の図書館で資料を探し、上賀茂神社(京都)とも交流しながら地道に研究を続けてきた。「一番の財産は、興味を持ってくれる研究会の仲間ができたこと。『学問は執念』と激励してくれた先生もいた。批判もあったけれど、『知りたい』という気持ちが強くなってきた」とこ

れまでを振り返る。今年、フォーラムで本県周辺の人・物・情報の交流ルートについて講演した入間田さんは「このように高いレベルの研究集会所が、地元の人々にとってのインスピレーションになってきたことは全国的にも珍しく、これまでの学問のあり方に風穴を開ける快挙」と驚きつつ、「内容も学会・県史レベルで議論されてきた枠組みを超えるような、新しい問題が取り上げられていく」と惜しみない称賛を送る。

「尾駁の牧」について決定的な証拠はまだないが、「学術成果の積み重ねにより、その可能性について十分な裏付けを得た。何となく類推するだけにどまっていた状態から比べ、飛躍的な前進」と強調した。

村文化協会の高田孝徳会長(72)も「村の文化史に一石を投じる取り組み。よくこまってきたと思う」と評価、論考集の完成を待ち望む。

## 「地域見直すきっかけに」